

## 暑さに負けない米づくり

～白未熟粒を減らすために～

高温障害（白未熟粒多発）対策は、水稻を「水分不足にしない」と「光合成力を低下させない」ことが大事です。※営農 News 第3207号（令和7年1月7日発行）「水稻白未熟粒発生の仕組み」もあわせてご覧ください。

## 高温障害対策

出穂から成熟まで超大事



## ◎水稻を水分不足にしない ～細心の水管理で根を健全に！～

一番大事なことは、生育期間を通して根を健全にして吸水力を維持することです。中干しが終わったら、間断かん水（入水を止め自然落水とし、田面が乾く前に入水する）を行ない、土の中に酸素を供給し根を健全に保つとともに水稻に水を供給します。特に出穂期前から成熟期までは水を多く必要とする時期なので、田面が乾かないように注意が必要です。田面に土が見えるようになり、みぞや足あとに水が残っている状態で入水しましょう（飽水管理）。出穂後30日間は落水せず飽水管理を行います。

## ◎光合成力を低下させない ～チッソ追肥をどうするか～

光合成力を高めるためにはチッソの追肥が有効です。穂肥を施用しても出穂期前に葉色がかなり薄い場合（葉色版で3.5以下程度）は、出穂期3日前ころに10aあたりチッソ1～2kg施用します。全量基肥肥料を施用した水稻では判断が難しいですが、葉色が薄くなると予想される場合は、出穂期10日前ころに同様に追肥します。チッソ追肥は早いと倒伏の可能性があります。また食味を落とすこともありますので、施用時期と量に十分注意します。

## ◎ケイ酸の施用 ～高温対策には必須の成分～

ケイ酸は過剰な蒸散を抑える効果があり、水稻の水分不足を防ぎます。また、葉を直立させて光合成を促進します。根の活力を高める効果もあります。このように高温障害対策には重要な成分であり、土壌診断を行い不足していたら改良しましょう（基準値30～40mg/100g）。ケイ酸は幼穂が形成されてから成熟期までの生育後半に多く吸収されます。そのため、後半まで根が健全であることが大変大事です。

## ◎深耕など ～水稻の生育環境を良好に～

作土が深いと、養水分の吸収範囲が広くなり、水不足にならず、またチッソの吸収が多くなり光合成力の低下を防ぎます。作土が浅い圃場は15cm程度の深耕を行きましょう。ただし、肥沃な圃場を深耕すると、養分（特にチッソ）の吸収が多くなり倒伏が多くなる可能性がありますので、施肥量に注意する必要があります。

その他、前年のワラが分解せずに多く残っていると、硫化水素の発生（ワキ）などで根が傷み、結果として高温障害を強く受けることがあります。秋起こしは早めに行い、ワラの分解を進めましょう。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

■ 営農 News は JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。